

2020（令和2）年度エリザベト音楽大学大学院の

博士學位論文、内容の要旨および審査結果の要旨について

学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号）第8条およびエリザベト音楽大学学位規程第12条により、次の者の博士論文内容の要旨及び審査結果の要旨を公表する。

氏名	坂本治希		
学位の種類	博士（音楽）		
学位記番号	甲第19号		
学位授与年月日	令和3年1月7日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
学位論文題目	デオダ・ド・セヴラックのピアノ作品研究		
学位論文等審査委員			
(総合審査) 委員長	教授	壬生千恵子	
	教授	馬場有里子	
	教授	柴田美穂	
	教授	垣内 敦	
(演奏審査) 委員長	教授	垣内 敦	
	教授	柴田美穂	
	講師	濱本 恵康（広島大学教授）	
	教授	壬生千恵子	
	教授	馬場有里子	
(論文審査) 委員長	教授	壬生千恵子	
	教授	馬場有里子	
	教授	柴田美穂	
	講師	コール, ジョン	

論文内容の要旨

デオダ・ド・セヴラック（1872-1921）は、南仏に生まれ、10歳年上のドビュッシー、3歳年下のラヴェルとともに、20世紀初頭のフランス音楽界に大きな足跡を残した作曲家である。当時のフランス音楽界の中央集権的あり方を批判し、30代終わりから故郷南仏に活動拠点を移したことから、「地域主義的な作曲家」といったイメージで捉えられることも多いが、ジャンケレヴィッチの著作や、近年のピエール・ギヨーの研究書などを通して再評価が進み、日本でも、国内版の楽譜出版などにより知名度が上がりつつある。ピアノ作品に関しては、1964年のBrody、2002年のFàbregas i Marcetによる博士論文などをはじめ、研究が進展しているが、これまで重要性が指摘されるに留まっていた装飾音の問題など、さらに詳しく検討されるべき余地も残っている。

本論文では、セヴラックのピアノ音楽について、構成や書法などに加え、とりわけ装飾音についての詳細な分析も含めた多角的な視点から検討するとともに、同時代のフランスの作曲家、特に、セヴラックが学んだスコラ・カントルムでの師ダンディおよびカントルムで共に学んだルーセル、また印象主義を代表するドビュッシーの創作スタイルとの比較を通して、セヴラックのピアノ音楽の特質と位置付けについて考察することをねらいとした。

第1章では、セヴラックのピアノ創作における3つの時代区分を提示するとともに、本論文で主な分析対象とする主要三大作品（《大地の歌》、《ラングドックにて》、《セルダーニャ》）の版の扱いに関して、出版の経緯や時期、版による主な相違点についてまとめた。

第2章ではまず、題材に見られる特色として指摘されてきた郷土性、宗教性、ノスタルジーについて、各時代に沿ってその具体的な現れを検討した。次いで、構成、書法について取り上げた。前者においては、これまで詳細な分析が行われてこなかった最初期の大作《ソナタ》ロ短調も含めて、比較的規模の大きな作品を分析し、時代ごとの傾向について考察した。第1時代の《ソナタ》、《大地の歌》はいずれも師ダンディの影響である循環形式が強く意識されており、第2時代の《ラングドックにて》ではラプソディー的性格の強く現れた多部分形式に近いものも見られるようになる。第3時代の《セルダーニャ》では、基本的な3部形式への回帰傾向とともに再び循環性への意識が見られた。書法については、テクスチュアおよび音域、ハーモニーと持続音、旋法の使用、ディナーミク、拍子、リズムの6つの要素に分類し、時代ごとの傾向を考察した。なかでも「テクスチュアおよび音域」では、全時代に共通する要素としての多層的な性格、また、第1時代における師ダンディからの影響である対位的な手法、第2時代における持続音との関連性の高まり、第3時代におけるテクスチュアの簡素化傾向と跳躍の多さの傾向を見て取ることができた。また「リズム」は特に第3時代において曲の構成そのものに大きな影響を与えており、スペイン音楽から着想を得たリズムが多用され、それまでの時代と明確に異なる作風を形作っている。

第3章では、セヴラックのピアノ作品における重要な要素の一つと指摘されながら詳しく検討されてこなかった装飾音について詳細に分析し、考察を行った。主要三大作品においては、第2時代（《ラングドックにて》）以降に装飾音使用の総数が明らかに増え、第3時代の《セルダーニャ》では、短前打音に加えてモルデントが最も多く使われている。全体を通して、使用頻度上特に重要なのは前打音とモルデントである。前打音は、第2時代までは上行形が頻繁に使われ、音程については一般的な短2度のほか4度等より跳躍的なものへの好みも見られた。ロココ様式への愛着を示す《ボンパドゥール夫人へのスタンス》では、メロディーの3度跳躍を埋める一般的な前打音のほかに、重音によるもの、不協和な響きを伴う跳躍、異なる向きの前打音の連続など、様々な手法が追求されている。一方モルデントについては、上へのモルデントが圧倒的に好んで使われている。次いで、装飾音の使用効果や意図について検討し、「構造的な役割」（特に、場面転換、調性変更の暗示など）、装飾音の音程変化を効果的に用い「リズムの一部を成すもの」、宗教性や郷土性を感じさせる鐘の様々な表情や印象派的な水の描写などの「描写的性格」、旋律の強調や即興性など「メロディーに関するもの」、および「その他」の5つに分類した上で、それぞれ考察を行った。

第4章では、セヴラックがスコラ・カントルムで教えを受けた師ダンディ、学友のルーセル、さらに、セヴラックの音楽的特徴を共有し、印象主義を代表するドビュッシーの作品との比較を行い、ダンディの《山の詩》とその影響を受けたセヴラックの《大地の歌》、同時期に書かれたルーセルの《田舎風の曲》とセヴラックの《ラングドックにて》、ドビュッシーについては《前奏曲集》を中心に取り上げて考察した。《山の詩》と《大地の歌》については、構成における循環性や題材における地方性や郷土愛に明らかな類似がある一方、後者はより農耕や宗教性との結びつきが強く、また装飾音の使用頻度や工夫においてダンディとの違いが見られた。《田舎風の曲》と《ラングドックにて》は、いずれもダンディの循環形式の影響から離れ、ラ

プソディー的な要素を盛り込んだ最初の作品である点やテクスチュアの多層構造など、構成や書法上の共通点が多く見られた。一方、拍子感のぼかしは両者に見られるが、前者は明確な拍子感との対比、後者は不明瞭な拍子感を狙う違いがある。また装飾音はセヴラックに多く使用され、ルーセルでは限定的である。ドビュッシーの《前奏曲集》は平行和音や5音音階など印象主義的共通点が指摘されてきたが、他にも、終結部における響きの段階付けなど、セヴラックの先行作品に見られる特徴が見られた。装飾音については、ショパンが追求したアルペジオ的な装飾音が両者ともに見られる一方、セヴラックの場合はより多層的な効果、ドビュッシーはよりリズムの面白さを表現する手段として用いているなどの違いが見られた。

セヴラックのピアノ作品には、南仏という郷土に深く根ざした精神的要素、スコラ・カントルムでダンディから学んだ循環形式の影響、スペイン、カタロニア文化や音楽との結びつき、装飾音の使用における様々な試みなど、多様な特徴が見られ、これらの融合こそセヴラックの音楽的魅力の一つであると言える。その中で、装飾音においてはモルデントと前打音が特に多用されているが、その効果は、ロココ様式を想起させるものから、宗教的、郷土的あるいは印象主義的要素を示す描写的なもの、場面転換など構造的な役割を持つもの、リズムや旋律を引き立たせるものまで、多岐にわたりその豊かな可能性が追求されている。ダンディ、ルーセル、ドビュッシーの場合と比較しても、使用頻度や、好んで使われる装飾音の傾向、求める表現効果などにおいて違いがあり、装飾音は、セヴラックがピアノ曲の創作上特に多くの試みを行い、その音楽的個性を示している重要な要素となっている。

審査結果の要旨

1. 演奏審査

ドビュッシーやラヴェルに代表される華やかなフランス近代音楽において、デオダ・ド・セヴラックは様々な功績を残しつつも、その作品は我々にとってはどちらかというと地味な存在である。その彼のピアノ作品に影響を与えた他の作曲家の作品を年代別に比較しながら演奏することで、その足跡と意義、魅力を伝えようとする試みであったように思う。

第1時代の《日向で水浴びをする女たち》や7曲からなる《大地の歌》はV. ダンディの《旅の画集》との関連で演奏された。続く第2時代として《ラングドック地方にて》からの抜粋が、ルーセルの《田舎風の曲》からの抜粋と並べてそれぞれ2曲ずつ演奏された。そもそもここまでの楽曲は類似する書法で作曲されたものが多く、聴き手としては変化を感じにくく、停滞感を否が応にも感じてしまい、また坂本氏の好みの響きに終始された印象も多少あり、奏法や選曲にさらなる工夫を見せることで、セヴラック作品の魅力をより多く示すことができたのではないかと感じた。第3時代として紹介された《セルダーニャ》からの3曲は、その前に演奏されたアルベニス《イベリア》の影響をかなり受けている印象を誰しもが感じるものであった。その反面、秀作《イベリア》と並べて演奏したことで、セヴラックの弱点も見えてしまったのが残念である。

その一方で、坂本氏の演奏に対する姿勢は、繊細な印象派的響きや民族的なリズム感を心から楽しみ、世にその魅力を伝えたいという意志を強く感じるものであったし、技巧的にも表現的にも安定した実力を見せていたことは審査員全員の認めるところであり、博士号授与に値する熟演であった。今後の彼の演奏のさらなる成長に期待したい。

2. 論文審査

本研究は南仏出身の作曲家、デオダ・ド・セヴラック（1872-1921）のピアノ作品について論じたものである。セヴラックの音楽については、近年、再評価の気運が高まり、同時に研究も徐々に進められてきているが、世界的にみてもまだ十分な検証・分析がなされているとはいえず、また日本においては、演奏される機会が少なかったこともあり、音楽研究領域において、包括的に取り上げた研究は殆どなかった。

本論では、作品の時代区分、題材・書法を始めとする音楽的特徴の抽出、装飾音に関する分析、さらに同時代の他の作曲家の作風との比較がおこなわれており、セヴラックのピアノ音楽を理解するために必要とされる基本情報を網羅的に整理されている。そして、その創作スタイルに関する多方面からの検討をもって総括とされ、セヴラックのピアノ音楽に関する、日本における初めての包括的な研究としての意義が認められる。

中でも、セヴラックの音楽を形作る重要な要素のひとつでありながら、詳細な分析がこれまでおこなわれていなかった装飾音に着目し、独自の分析からその特徴を明らかにしたことは、本研究の独自性を担保するものといえる。一章を割かれて展開された、この装飾音についての微細な分析は、楽譜からの丹念な抽出作業によって整理されたものであり、ここから、セヴラック自身が装飾音のもつ可能性を追求していたであろうということが導き出されている。また、同時代のフランス音楽の作曲家、ダンディ、ルーセル、ドビュッシーとの作風の比較は、セヴラックの音楽の歴史上の位置づけを考える上で、演奏家にとって貴重な資料となるであろうと考えられる。

ピアノ奏者として、演奏技法の側面等からより幅広い視点と深い考察を求めることにより、さらに充実した論文となった可能性は否めないが、セヴラックのピアノ作品に関する日本語による包括的な基礎資料として一定の成果をもつこと、また博士後期課程におけるピアノ・リサイタルおよび演奏審査において、実践面からの検証が十分におこなわれてきたことから、博士後期課程における研究成果として一定の評価を与えることができる、という判断に至った。

3. 総合審査

以上、演奏審査と論文審査の両方を鑑みた総合審査において、本研究が新規性と独自性を持ち、また、今後この分野を研究する者に寄与する基礎研究としての十分な成果を認められるとの判断から、全員一致で「博士(音楽)Doctor of Musical Arts」の学位を授与するに値するものと判定された。